実 践 報 告

協定等に基づく 多文化共学短期受入留学プログラム （通称：京都サマープログラム）

—10 年間の実践記録と今後の展開への視点—

韓　立友 *、西島　薫 **、河合　淳子 ***

要　旨

本稿の目的は、京都大学で 10 年間継続してきた「多文化共学短期受入留学プログラム」について、設立の経緯、カリキュラム、教育効果そして今後の課題と展開を報告することである。本プログラムは、京都大学と大学間交流協定等を締結している海外のトップ大学の学生を約 2 週間、本学に受け入れる短期留学プログラムである。対象大学は、2012 年度の北京大学から始まり、2021 年度までに東アジア、アセアン、欧州、北米、アフリカの 20 大学以上に拡大した。本プログラムは、(1) 学術講義、(2) 日本語授業、(3) Fieldtrip や Cultural Experience 等から構成される。本プログラムでは、多文化理解、学際的視野、語学力、リーダーシップの養成を柱として、教育効果の高いカリキュラムの開発を目指してきた。2020 年度に始まった新型コロナウィルスの拡大以降も、オンラインでの実施に切り替えることで、プログラムを継続してきた。本稿の最後では、単位認定や運営体制の効率化の必要など課題を指摘した。そして今後の展開として、新会社の設立と一部業務の委託を提案した。

【キーワード】短期受入、共同学習、学際性、語学学習、学生交流

1. プログラムの背景と目的

本稿の目的は、2012 年から 2021 年度現在まで実施されてきた、海外からの学生を 2 週間程度京都大学（以下、本学）に受け入れる「多文化共学短期受入留学プログラム（現在の通称：京都サマープログラム）」における教育実践を報告することである。特に本稿では、海外学生 (1) と京都大学生（以下、本学学生）の共学に焦点を当て、プログラム設立の経緯、内容そして教育効果について報告する。

現在の京都サマープログラムは二つのサブプログラム、すなわち英語を主たる教授言語とし、国際高等教育院（以下 ILAS）が実施する ILAS プログラム、日本語を主たる教授言語とし、京都大

* 京都大学国際高等教育院
** 京都大学学際融合教育研究推進センター
*** 京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター

学アジア研究教育ユニット（以下 KUASU）が実施する KUASU プログラムがあり、互いに乗り入れながら実施している。両サブプログラムにはそれぞれの系譜がある。

ILAS プログラムの端緒は、2012 年 8 月に実施された「北京大学学生のための『京都サマースクール』」に遡る。これは、北京大学生を対象に、京都大学で開催された短期受入プログラムである。同プログラムが開始された背景には、当初、本学が大学間学生交流協定を結んでいるような各国有数の研究型総合大学からの留学生数が低調であったこと、そして本学学生の海外留学者数も十分でない状況があった（韓・西島・家本・河合 2021）。

他方、KUASU プログラムは、「京都で学ぶアジアと日本」プログラムとして、2014 年度に開始された。これは世界展開力事業「『開かれた ASEAN ＋ 6』による日本再発見―SEND を核とした国際連携人材育成」プロジェクト（以下、SEND）の一環である。その目的は、外部の視点から日本社会を見つめ直し、日本を再発見することで、アジア地域および世界各地における相互理解、共通の問題の解決を目指すことである（森・佐々木 2015）。KUASU を構成する一組織であった国際交流推進機構国際交流センター（当時）を中心に、KUASU の主導により当プログラムが開始された。

つまり「北京大学学生のための『京都サマースクール』」と「京都で学ぶアジアと日本」は、設立当初は、別々のプログラムとして実施されていた。しかし、目指す目標には共通点も多く、より充実したプログラムを実現するために、2016 年度以降は「京都サマープログラム」として合同開催することになった。両プログラムが合同で実施することで、体制を強化することが出来ただけでなく、プログラムの規模も拡大することが出来た。これによって、海外学生と本学学生の両方の国際性を高める共学プログラムとして発展することが出来た。そして（1）学術講義、（2）日本語を教える講義（以下、日本語授業）、（3）Fieldtrip や Cultural Experience 等の学外研修から構成される現在のプログラムが形成されていった。

先述の通り、プログラム開始当時、本学学生と海外トップ大学の学生との交流の機会が十分に提供できているとは言えない状況であった。そこで当プログラムでは、海外学生と本学学生の共学の実現を理念に据えて、プログラムを今日まで展開してきた。当プログラムは、海外学生と本学学生が共に学ぶことの出来る環境を実現することで、海外学生と本学学生の国際性を諸側面―（a）多文化への理解・関心、（b）学際的アプローチの理解、（c）言語運用能力、そして（d）企画力・リーダーシップ・コミュニケーション能力―から向上させるプログラム作りを目指してきた。（a）～（d）の達成に関する検証は後述する。

2.　10 年間の実績

2.1.　概観

2012 年度から 2021 年度までの参加者は、海外学生が 396 名、本学学生が 353 名（本学学生リーダー、本学サポーターと受講生の延べ合計数）である [(2)]。表 1 の通り、2012 年度のプログラム開始以降、当プログラムは規模を拡大させながら、多様な国・地域からの受入れを行い、海外学生と本学学生に共学の機会を提供し、現在に至る。

2.1.1.　北京大学学生のための『京都サマースクール』（現 ILAS プログラム）2012 年度～ 2015 年度

先述の通り、当プログラムの端緒となったのは、2012 年 8 月に開始された「北京大学学生のための『京都サマースクール』」である。2015 年までの 4 年間は、対象を北京大学からのみに限り、受入れ人数も 15 名以内に絞り、質の検証を行いながら実施した [(3)]。当時のプログラムは学術講義

表１　派遣元大学別海外学生の参加人数

	海外学生合計	海外学生の派遣元大学名																		京都大学生			
		ILAS											KUASU										
		北京大学	香港中文大学	国立台湾大学	延世大学校	ハイデルベルク大学	欧州拠点 *** ハイデルベルク以外	戦略パートナー・ウィーン大学	北米拠点 ***	アフリカオフィス ***	マヒドン大学	KCJS 加盟大学 ***	ベトナム国家大学　ハノイ校	チュラーロンコーン大学	インドネシア大学	シンガポール国立大学	北米拠点	その他	京大生合計	サポーター *	受講生	リーダー **
北京大学サマースクール 2012	15	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							15	15		(2)
北京大学サマースクール 2013	14	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							8	8		(2)
2014 年度京都で学ぶアジアと日本	15												10	5	—	—	—	—	13	13		(2)
北京大学サマースクール 2014	14	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							13	13		(2)
2015 年度京都で学ぶアジアと日本	11												3	3	5	0	—	—	15	15		(3)
北京大学サマースクール 2015	15	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							8	8		(2)
京都サマープログラム 2016（KUASU）	18												6	5	5	2	—	—	18	18		(3)
京都サマープログラム 2016（ILAS）	25	15	3	5	2	—	—	—	—	—	—	—							12	12		(2)
京都サマープログラム 2017（KUASU）	18												5	6	4	3	—	—	17	17		(2)
京都サマープログラム 2017（ILAS）	26	15	3	5	3	—	—	—	—	—	—	—							25	25		(2)
京都サマープログラム 2018（KUASU）	19												5	6	5	3	—	—	18	18		(2)
京都サマープログラム 2018（ILAS）	25	9	7	3	4	2	—	—	—	—	—	—							18	18		(2)
京都サマープログラム 2019（KUASU）	18												4	7	3	3	—	1	16	16		(2)
京都サマープログラム 2019（ILAS）	28	10	6	4	4	0	4	—	—	—	—	—							18	18		(2)
京都スプリングプログラム 2021（KUASU）	19												6	3	5	2	3	—	60	10	31	3
京都スプリングプログラム 2021（ILAS）	38	8	6	3	6	4	—	2	4	—	5	—								13		3
京都サマープログラム 2021（KUASU）	30												7	8	5	3	7	—	79	11	47	3
京都サマープログラム 2021（ILAS）	48	6	6	0	5	5	2	4	5	3	3	9								14		4
合計	396	121	31	20	24	11	6	6	9	3	8	9	46	43	32	16	10	1	353	262	78	13

注：* 京都スプリングプログラム 2021、京都サマープログラム 2021 は、受講生兼サポーターを含む。“—” は未開講を表す。

注：**2012 年度から 2019 年度まではサポーターの中からリーダーを選出していた。2012 年度から 2019 年度までのリーダー数については括弧を付して表記する。

注：*** 各拠点を通じて参加した大学は次の通りである。欧州拠点（ゲッティンゲン大学、ミュンヘン工科大学、ボン大学、チューリッヒ大学、ハイデルベルク大学）、北米拠点（ジョージ・ワシントン大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校）アフリカオフィス（アジスアベバ大学、ザンビア大学）、KCJS 加盟大学（ブラウン大学、コロンビア大学、ペンシルバニア大学、ワシントン大学セントルイス校）

と Fieldtrip や Cultural Experience 等の学外研修からなる内容であった。例年、参加者からの評価は非常に高く、これをモデルとして拡大させる構想が生まれてきた。

2.1.2. 「京都で学ぶアジアと日本」研修（現 KUASU プログラム）2014 年度～ 2015 年度

先述の通り、KUASU 主催の「京都で学ぶアジアと日本」研修は、2014 年度にアセアン諸国の大学を対象に開始された。すでに 2013 年度には、アセアン諸国に学生を派遣するプログラム（SEND）が行われていた。受入、派遣が両輪で稼働することにより、海外学生と本学学生の双方向型の国際交流を実現することになった。日本人学生も日本文化や日本語を紹介するためには、日本語や日本文化に関する専門的知識や学術的アプローチを学習する必要がある。そのため、受入プログラムである「京都で学ぶアジアと日本」研修に参加する本学学生は、日本語や日本文化を海外学生と共に紹介することが求められる。他方、派遣プログラムでは、本学学生は海外の大学へ出か

け、現地の言葉を学ぶとともに、日本語や日本文化について海外の学生に紹介することが求められる。日本語と日本文化を捉え直す機会が、受入れプログラム、派遣プログラム双方にあり、それが他者とのかかわりの中で展開され、以下に述べる京都サマープログラムの土台を築いてきた。

2.1.3.　京都サマープログラム（2016 年度～現在）

2016 年度から、「北京大学学生のため『京都サマースクール』」と「京都で学ぶアジアと日本」研修の両プログラムは、合同で「京都サマープログラム」として実施するようになった。「北京大学学生のため『京都サマースクール』」と「京都で学ぶアジアと日本」研修は、海外学生への日本理解の促進、本学学生の国際化、海外学生と本学学生の共学など、多くの点で目的を共有していた。その一方、重点の違いも存在していた。「北京大学学生のための『京都サマースクール』」は、日本の政治や経済などの分野を海外学生に伝えること、他方、「京都で学ぶアジアと日本」研修は日本語・日本文化を海外学生に伝え、本学学生の国際化を促すことに重点を置いていた。合同開催により、両プログラムが重視してきた共通の理念である共学、そして両プログラムの特性の相乗効果によりプログラム内容の充実化が予測された。さらに両プログラムを合同で実施することで実施体制がより強化され、プログラムの規模をより一層拡大させることが期待できた。

2016 年度の合同開催以降、京都サマープログラムは、参加大学の数を継続的に拡大させてきた（図 1 参照）。2016 年度には、大学間学生交流協定校である延世大学校（韓国）、国立台湾大学、香港中文大学を参加校に加えた。2018 年度には、参加大学を欧州に拡大し、ドイツのハイデルベルク大学が新たに参加した。さらに 2019 年度には、ハイデルベルク大学以外の欧州の大学が加わった。2020 年度は新型コロナウィルス拡大の影響で、サマープログラムが 2 月に延期となり、オンラインでの実施を余儀なくされた。オンラインの利便性を活かし、北米のジョージ・ワシントン大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、オーストリアのウィーン大学そしてタイのマヒドン大学を参加大学に加えた。2021 年度のオンラインプログラムでは、参加大学をさらに拡大し、アフリカのアジスアベバ大学とザンビア大学から学生を受け入れた。そして京都アメリカ大学コンソーシアム [(4)]（KCJS; Kyoto Consortium for Japanese Studies）の協力により、ブラウン大学、ワシントン大学セントルイス校およびコロンビア大学なども参加した。スイスのチューリッヒ大学も加えた。

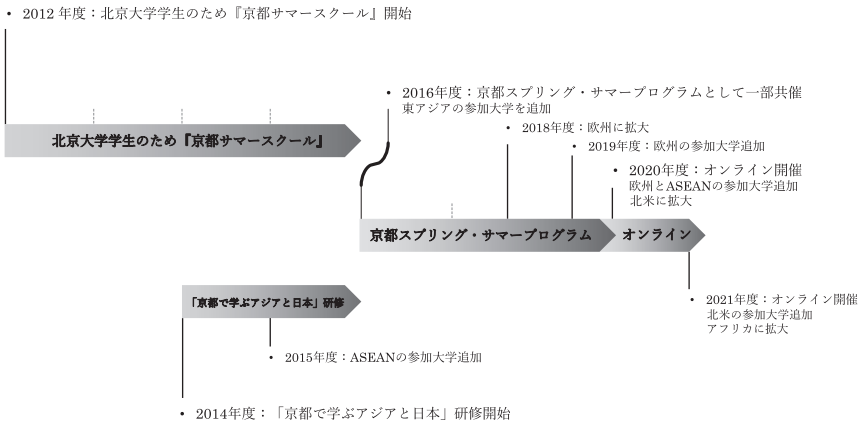

図１　短期受入プログラム発展の経緯

2.2.　実施体制

当プログラムは、本学と大学間交流協定等に基づいた派遣元大学との協力によって実施されてきた。当プログラムの実施体制は、図２通りである。

ILAS プログラムと KUASU プログラムは、それぞれの実施責任者である国際高等教育院長および KUASU ユニット長の下、両組織の短期受入プログラム担当教職員が企画・運営を行ってきた。プログラム担当教職員は、主にカリキュラムの組成、派遣元大学との調整、海外学生の選考と受入に関する諸手続き、本学学生の募集と選考、学術講義および日本語授業を実施するため学内外の教員への依頼と調整、その他学外組織との調整等を行ってきた。加えて、一部派遣元大学との調整に関しては、当プログラム担当教職員に加えて、学内組織である国際戦略本部、欧州拠点、北米拠点、アセアン拠点、アフリカオフィスの協力を得た。また学外組織である KCJS とはコンソーシアムメンバー大学への募集案内、学生の推薦、各種調整で連携した。オンラインプログラムの実施にあたっては、PandA（本学の学習支援サービス）や Zoom の運用に関して、情報環境機構所掌の学術メディアセンターの協力を得た。主に教員は教育に関する業務をおこない、職員は手続き面を主として担当しているが、お互いに密接に連携協力しながら実施している。これらの業務には経験とスキルが必要であり、現在プログラム専属の派遣職員１名を含む体制で事務側は対応している。

派遣元大学に関しては、各大学の国際交流担当の教職員あるいは各大学の関連学部の担当教職員が、参加学生の公募と本学への選抜、推薦を行った。

2.3.　予算

10 年間、予算面では実施年度によって変わってきたが、現在では次のようになっている。現在、プログラムはワイルド & ワイズ共学教育受入れプログラム事業、国際学術ネットワーク強化推進事業経費（以下、ウィーン強化経費）、および「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成―京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム―」（機関経費）の支援によって運営されている。これらの予算から、学外講師費用、日本語講師費用、プログラムの支援に従事する本学学生リーダーとサポーターの謝金、報告書、対面の場合は Fieldtrip、宿泊補助費などを

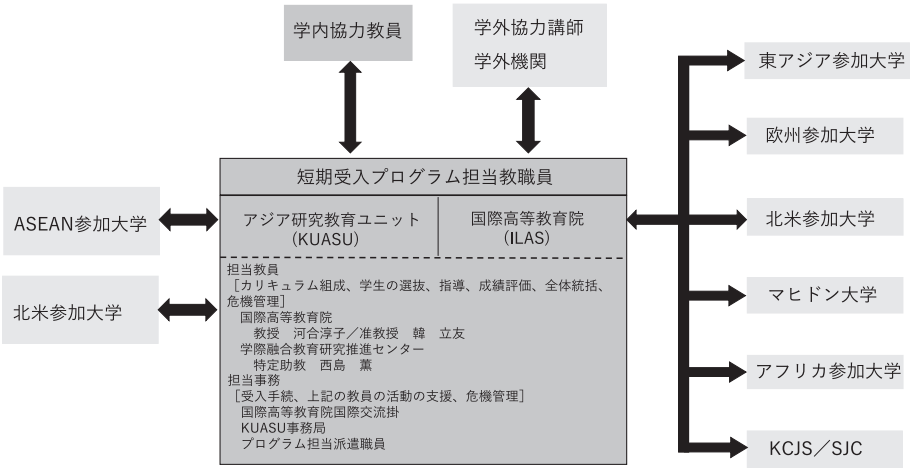

図２　実施体制

支出している。また、海外学生および派遣元大学が負担するものとして、渡航費、滞在費そして保険代がある。これらの予算の中には、年度毎に申請する予算もあり、長期的かつ安定的にプログラムを継続出来るような仕組みが必要である。5. で述べる会社化の構想は、費用面でのプログラムの継続性という課題と密接に関連している。

3. プログラムの内容

当プログラムの内容は、（1）学術講義、（2）日本語授業、（3）Fieldtrip や Cultural Experience 等その他の活動に分類することが出来る。（1）～（3）は、2016 年以降一貫して、プログラムの柱を構成してきた。

表 2 は 2021 年度オンラインプログラムの時間割を簡潔に示したものである。それぞれオレンジ色の部分が学術講義、緑色の部分が日本語授業、黄色の部分が Fieldtrip や Cultural Experience 等その他の活動である。薄い青色は課外の活動である。

（1）学術講義は 10 コマ（20 時間）程度異なる講義を提供し、5 コマ（10 時間）の講義への出席を必須としてしてきた。（2）日本語授業に関しては、毎年度およそ 10 時間の授業を提供してきた。初級 2 クラス、中級 2 クラスそして上級 1 クラスの日本語授業を提供している。オンラインプログラムでは、参加学生の居住する地域に応じて、午前の日本語授業を中心としたシフト A と午後の日本語授業を中心としたシフト B に分割した。シフト A およびシフト B の日本語授業は参加者の日本語レベルに応じて難易度の差はあるものの、基本的には同等の内容の日本語の授業を提供している。（3）に関わる活動としては企業への訪問、日本文化紹介、体験、京都大学紹介、学生討論会、研究室訪問等を実施してきた。参加学生には、プログラム全体を通じておよそ 36 時間程度の出席を求めている。現在、京都大学からの単位付与は行っていないものの、プログラムのカリキュラムは、プログラム後に提出を課しているレポート執筆を含めて、大学設置基準が定める 2 単位相当の学習時間を想定している。

3.1. 学術講義

学術講義では、共学を軸とした学際的なプログラムを象徴する講義群を提供してきた（表 3）。毎年、内容に変更を加えるが、例えば 2020 年度と 2021 年度の提供科目に基づいて、学術講義の概要を示すと次のようになる。①食糧問題（英語）、②公害病（英語）、③エネルギー問題（英語）、④ジェンダー（英語）、⑤捕鯨と食文化（英語）、⑥日本古典文学（英語）、⑦幕末外交史（英語）、⑧日本的経営（英語）、⑨日本の教育（日本語）、⑩社会言語学（日本語）、⑪霊長類学（英語）、⑫昆虫学（英語）となる。オンライン形式における講義は選択制であり、日本語で実施する講義には、おもに日本語既習者が参加する。また、講義によってはスライドに日本語と英語を併記する場合もあり、様々な日本語レベルの海外学生が出席できるよう配慮している。内容に関しては、日本の社会問題を扱う講義（①～⑤）、日本の文化や歴史を多様な観点から論じる講義（⑤～⑩）、本学独特の学問分野に触れつつ①～⑩に通じる現代社会の課題への視点が得られる講義（⑪～⑫）の構成となっている。参加学生の専門外の内容やアプローチに触れることで、専門における学修・研究の刺激ともなり得る内容を意図している。

表２　短期受入プログラムの内容

Japan Time		08:30-10:30	10:40-12:40	12:50-13:35	13:45-14:30	14:30-16:30	16:40-18:40	18:50-19:35	19:45-21:00
Day1	Jul.29 (Thu.)	Preparation					Preparation		
Day2	Jul.30 (Fri.)	Orientation A(KUASU)	Japanese A	KUASU※グループ発表準備 / ILAS※※ Conversation in Japanese	Discussion in English	Academic Lecture ①	Japanese B	Orientation B(ILAS)	
Day3	Jul.31 (Sat.)	Academic Lecture ②	Japanese A	KU Introduction（京大紹介）		Academic Lecture ③	Japanese B	Conversation in Japanese	Discussion in English
Day4	Aug.1 (Sun.)	Free Day (student activity)							
Day5	Aug.2 (Mon.)	Academic Lecture ④	Japanese A	KUASU※グループ発表準備 / ILAS※※ Conversation in Japanese	Discussion in English	Academic Lecture ⑤	Japanese B	Lab Visit Ⅰ	KU Introduction（京大紹介）
Day6	Aug.3 (Tue.)	Academic Lecture ⑥	Japanese A	KUASU※グループ発表準備	ILAS Conversation in Japanese	Academic Lecture ⑦	Japanese B	Conversation in Japanese	Discussion in English
Day7	Aug.4 (Wed.)	Academic Lecture ⑧	(Makeup Japanese language classes may be held.)	13:30-16:30 Cultural Experience B			Japanese B	Discussion in English	
Day8	Aug.5 (Thu.)	Academic Lecture ⑨	Japanese A	KUASU※ ILAS Discussion in English	13:45-16:45 Fieldtrip		Lab Visit Ⅱ	Conversation in Japanese	Discussion in English
Day9	Aug.6 (Fri.)	Cultural Experience A				Academic Lecture⑩	(Makeup Japanese language classes may be held.)		
Day10	Aug.7 (Sat.)	Discussion Session among Students A	11:40-13:40 Academic Lecture⑪			Discussion Session among Students B(ILAS)⑫⑬			
Day11	Aug.8 (Sun.)	Free Day (student activity)							
Day12	Aug.9 (Mon.)		(Makeup Japanese language classes may be held.)				(Makeup Japanese language classes may be held.)		
Day13	Aug.10 (Tue.)	Final Presentation A(KUASU)⑭⑮		Final Presentation B(ILAS)⑭⑮			Completion Ceremony B(ILAS)		
Day14	Aug.11 (Wed.)	Completion Ceremony A(KUASU)	Online Farewell Party A				Online Farewell Party B		

Orange	Selectable at least 5 out of 11 sessions.	Light Blue	Free participation
Green	Japanese Class	Yellow	Mandatory for both shifts
		White	Free time &Free day

KUASU ※グループごとに最終発表の準備

KUASU ※ Free participation: Preparation for final presentations

ILAS ※※の時間は日本語会話教室（前半 45 分）と英語討論（後半 45 分）

ILAS ※※ Free participation: Conversation practices in Japanese and Discussions in English

表３　学術講義一覧

所属・身分は講義提供当時

氏名	所属（当時）	タイトル	言語	開催年度	形態
植田 和弘	京都大学 経済学研究科　教授	日本の環境問題と環境政策	英語	2012	対面
村田 晃司	同志社大学 法学研究科・法学部　教授	米大統領選と日米中関係を展望する	英語・日本語	2012	対面
若林 靖永	京都大学 経営管理大学院　教授	日中韓の企業経営・マーケティング	日本語（中国語通訳）	2012	対面
横田 冬彦	京都大学 文学研究科　教授	江戸時代の出版文化	日本語（中国語通訳）	2012	対面
井上 恵美子 / チョイ イー ケエヨン	京都大学 経済学研究科　講師 / 京都大学 経済学研究科　助教	Economics and the Environment /Economic Growth, Ecological Sustainability and Environmental Ethics ― the Three Gorges Connections	英語	2013	対面
沈 金虎	京都大学 農学研究科　准教授	家族経営、経済発展と草原地域の砂漠化 ―中国草原地域の砂漠化の原因と今後の対策について―	中国語	2013	対面
大谷 雅夫	京都大学 文学研究科　教授	日本の古代文学と中国文学	日本語（中国語通訳）	2013	対面
南部 広孝	京都大学 教育学研究科　准教授	日中教育の比較	中国語	2013	対面
近藤 直	京都大学　農学研究科　教授	現代と未来の食糧・環境・生命について	英語	2014, 2015	対面
		食料・環境・生命に関わる技術と研究の現状と将来展望		2016	対面
		90 億人の食料生産と環境保全のためのトリプル A テクノロジー		2017	対面
		90 億人の食糧生産と環境保全のための革新技術		2018	対面
		人口 90 億人時代のためのセンサー技術に基づく食料生産と食品ロス削減		2019	対面
		90 億人のための「食料―環境」問題を解決するスマート生産		2020	オンライン
		持続可能な食料生産のためのスマート農畜水産		2021	オンライン
若林 直樹	京都大学 経営管理大学院　教授	日本企業の組織経営：高い忠誠心のもたらす効果	英語	2014	対面
		日本企業における組織と経営	英語	2021	オンライン
元木 泰雄	京都大学 人間・環境学研究科　教授	平安京―特色と変容	日本語（中国語通訳）	2014	対面
山室 信一	京都大学 人文科学研究所　教授	日本の政策決定過程と非戦思想	日本語（中国語通訳）	2014	対面
マクレラン ベンジャミンクレイグ	京都大学 エネルギー科学研究科　准教授	エネルギー問題と人類文明の持続的発展	英語	2015	対面
湯川 志貴子	京都大学 国際高等教育院 日本語・日本文化教育センター　准教授	日本人の美意識	英語	2015	対面
		日本古典文学に見る日本人の美意識	英語	2016, 2017, 2018 2019, 2020, 2021	対面 オンライン
永井 和	京都大学 文学研究科　教授	東アジアの近代史を考える	日本語（中国語通訳）	2015	対面
岩田 高明	京都府政策企画部計画推進課　課長	京都府総合計画「明日の京都」による府政マネジメント	日本語（英語通訳）	2016	対面
河合 淳子	京都大学 国際高等教育院　教授	学校教育にみる日本文化の諸相	日本語	2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021	対面 オンライン
松沢 哲郎	京都大学 高等教育院・霊長類研究所　教授 / 特別教授（2016–）	チンパンジーが教えてくれた人間の心	英語	2016, 2017*	対面
		チンパンジーが教えてくれた人間の本性	英語	2018	対面
		チンパンジー研究からみた人間の心の進化	英語	2019	対面
ファンステーンバールニールス	京都大学 教育学研究科　准教授	京都の歴史と文化	英語	2016	対面
		『日本を学ぶ』とはどういうことか ―その過去・現在・未来		2017	対面
奈良岡 聰智	京都大学 法学研究科　教授	空間と政治：近代日本における政治家の別荘	英語	2016	対面
バリハワダナ・ルチラ	京都大学 国際高等教育院　教授	日本語のウチとソト	日本語	2016, 2017, 2018	対面
ヒジノ ケン ビクター レオナード	京都大学 法学研究科・法学部　教授	望まれ、失望され、危ぶまれる民主制	英語	2017	対面
飯田 玲子	アジア・アフリカ地域研究研究科付属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター 特定助教 金沢大学 国際基幹教育院　講師（2021–）	高度経済成長と水俣病	英語	2018, 2019, 2020	対面 オンライン
		日本の高度経済成長と環境問題―水俣病を事例として―		2021	オンライン
柴田 洋志	京都市選挙管理委員会事務局　選挙課　課長	National election system and how it works	日本語（英語通訳）	2018	対面
杉本 淑彦	京都大学 教育学研究科　教授	現代日本文化のなかの源氏物語	日本語	2019	対面
山極 壽一	京都大学 総合地球環境学研究所　所長	人類の社会性の進化―霊長類学の視点から	英語	2020	オンライン
家本 太郎	京都大学 国際高等教育院　教授	日本語の社会言語学的諸相	日本語	2020, 2021	オンライン
松浦 健二	京都大学 農学研究科　教授	シロアリの世界への旅	英語	2020, 2021	オンライン
落合 恵美子	京都大学 文学研究科　教授 京都大学アジア研究教育ユニット ユニット長	アジアのジェンダー	英語	2020	オンライン
佐野 真由子	京都大学 教育学研究科　教授	幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考える	英語	2020, 2021	オンライン
ヒュー マイク	スタンフォード日本センター 所長	Japan's energy-environment conundrum	英語	2020, 2021	オンライン
川島 隆	京都大学 文学研究科　准教授	日本における『ハイジ』受容の諸相	英語	2021	オンライン
若松 文貴	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科 特任講師	日本の捕鯨：食と保護を巡る文化政治学	英語	2021	オンライン

* 台風による休講措置で不開講

3.2.　日本語授業

現在はプログラムの一つの柱となっている日本語授業であるが、ILAS プログラムの前身である「北京大学学生のための『京都サマースクール』」では、日本語授業は提供されていなかった。その力点は 3.1. で述べた学術講義、3.3. その他の活動（Fieldtrip および Cultural Experience）を通じて、日本文化、日本社会について理解を深めるとともに本学の最先端の研究に触れることにあったためである。現在も募集段階で日本語能力を要求しておらず、むしろ日本語学や日本語学習経験のない学生を優先している。しかし、2012 年度のプログラム開始当初より、参加者から日本語を学びたいという要望が出され、徐々に強まっていった。そこで、2016 年に国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターに講師を依頼し、入門レベルの日本語クラスの提供を開始した。上記の募集条件にもかかわらず、中級、上級の日本語能力を有する参加学生もいたため、以下に述べる KUASU プログラムの提供する中級以上の日本語授業を受講できることとした。

一方、KUASU プログラムは日本語や日本学を学ぶ学生を対象とした日本語で学ぶプログラムとして開始されており、2014 年度の開始当初より 3 レベルの日本語授業が提供されてきた。現地で日本語を熱心に学んでいる学生たちにとって、日本で本学の教員から日本語を学び、さらには本学学生と日本語で交流できる機会は貴重で、報告書に見る満足度は一貫して高い。

こうして学生の高い要望に支えられ、2016 年度～ 2019 年度は 4 レベル（初級、中級 I、中級 II、上級）、そして 2020 年度以降は 5 レベル（初級 I、初級 II、中級 I、中級 II、上級）各 10 時間の日本語授業を実施している。

3.3.　Fieldtrip および Cultural Experience など

当プログラムでは第 1 回より、学術講義と日本語授業の他にも、Filedtrip、Cultural Experience、学生のディスカッションなどを実施してきた（表 4）。これらの活動は、当プログラムにおいて、海外学生と本学学生がより深く交流する機会となっている。

Cultural Experience は、和菓子作り体験、友禅染体験、書道など幅広く日本文化を体験する内容となっている一方、Fieldtrip は、琵琶湖への実地学習や、関西に拠点を置く企業への訪問などを実施してきた。Fieldtrip と Cultural Experience の内容は大きく重なり合う場合もある。本稿では、訪問先と活動内容を基準として、1 行政政治、2 産業、3 日本文化、4 環境の 4 つのカテゴリーに分類した。1 に関しては、京都府や京都市役所などを見学し海外学生に日本の地方行政について学んでもらうこと企図している。2 に関しては、参加学生が、株式会社ナベルやパナソニックミュージアムなど日本の伝統や先端技術を担う企業を訪問し、日本の伝統的技術や先端的技術を学ぶことを目的としている。3 に関しては、参加学生が、美山のかやぶきの里、寺社仏閣の見学や茶道体験などを行うことで、日本文化を学ぶことを企図している。4 に関しては、琵琶湖疎水記念館や琵琶湖での湖上実習などを通じて、環境問題や環境と技術との関わりについて学習することを目的とした。また、2020 年度以降のオンラインプログラムでは、ペンや白紙など各自で準備可能な道具を用いて実施できるように工夫した。オンラインプログラムでは、京都国際マンガミュージアムの協力による四コマ漫画体験や、書道を専門とする教員による漢字の成り立ちに関する講義と硬筆の実習、学生を主体とした折り紙、和楽器の実演などを提供した。

海外学生と本学学生が特定のテーマに関してディスカッションを行う時間も設けてきた。KUASU プログラムでは、プログラムの最後に、海外学生と本学学生の混成チームによる日本語での合同発表を課してきた。その準備として、KUASU プログラムの学生は、プログラム期間を通じ

て、各チームで集まり、合同発表に向けてディスカッションを重ねる。また、2020 年度のオンラインプログラム以降は、海外学生と本学学生が特定のテーマについて議論する時間を設けた。また、ILAS プログラムでは、学生リーダーの主導の下、学術講義と関連するテーマに基づいて英語ディスカッションの時間を設けた。

表 4　Fieldtrip と Cultural Experience の訪問場所と活動内容一覧

分類 *	年度	場所	内容	分類 *	年度	場所	内容
1	2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017	府庁	議場見学、府政説明、知事副知事との質疑応答	3	2014	丸益西村屋 / 京菓子司　総本家　よし廣	学外研修・文化体験 学外研修・文化体験
1	2018	京都市役所	京都市長との質疑応答	3	2015	光峯錦織工房 / 組紐資料館 / 宇治 丸久小山園、槇島工場見学、抹茶工場	光峯錦織工房、くみひも体験 宇治 丸久小山園、槇島工場見学、抹茶工場見学、お茶審査室見学、茶室体験、抹茶の試飲、点て方体験
2	2016, 2018, 2019	株式会社ナベル	会長社長の講義・質疑応答、工場見学	3	2015	京丹波 / 丹波自然運動公園 / かやぶきの里 / たわわ朝霧	京丹波にて収穫体験、丹波自然運動公園にて調理体験 かやぶきの里ツアー、もちつき体験、たわわ朝霧見学
2	2016	サントリービール工場	サントリービール工場見学	3	2015	伏見稲荷大社	伏見稲荷大社
2	2017	丹波ワインハウス	ワイン工場の建学、ブドウ農園見学	3	2015	丸益西村屋 / 京菓子司　総本家　よし廣	友禅体験 / 和菓子作り
2	2017	京セラ美術館	京セラ美術館見学	3	2015	京都府総合資料館	学外研修
2	2018	パナソニックミュージアム	パナソニックミュージアム見学	3	2016	七條甘春堂	和菓子作り体験
2	2020	オンライン	工場紹介動画制作、社長及び工場長との質疑応答	3	2016	京丹波町 / 丹波自然運動公園 / 美山（かやぶきの里）	京丹波町にて収穫体験、丹波自然運動公園にて調理、 かやぶきの里散策ツアー、もちつき体験、買い物体験
2	2021	オンライン	動画制作、講義、ディスカッション、研究所所長との質疑応答	3	2017	貴船神社 / 温泉	貴船神社 温泉
3	2012	京都府北部・宮津	地引網体験	3	2017	京都大学総合博物館	京都大学総合博物館
3	2012	学研都市 / 宇治（平等院等）	京都探訪、学研都市宇治（平等院等訪問）	3	2017	長江家住宅	町屋：歴史的な都会での生活＆現代産業における建築
3	2012	茶道資料館 / 香老舗松栄堂 / 西陣織会館	京都体験プログラム　茶道、お香、着物体験（和の学校との協働）	3	2018	鞍馬寺 / 貴船神社	授業後企画 鞍馬寺、貴船神社
3	2013	清水寺 / 茶道資料館 / 京都伝統工芸館等	清水寺見学、裏千家茶道体験、京都伝統工芸館見学等	3	2021	オンライン	青蓮院
3	2013	南丹地域 / 美山 / 嵐山	南丹地域体験プログラム　京野菜収穫体験、調理体験、美山かやぶきの里 わら細工体験、保津川下り、嵐山周恩来石碑見学	4	2014, 2015, 2018, 2019	琵琶湖関連フィールドトリップ	疎水記念館見学、琵琶湖湖上実習（2019 年度）、博物館見学等
3	2013	月桂冠 / 源氏物語ミュージアム	月桂冠大倉記念館見学、源氏物語ミュージアム見学	4	2016	京都府京丹波町 / 三の宮基幹集落センター / 美山かやぶきの里	京野菜収穫体験、京野菜調理体験、かやぶきの里ツアー、餅つき体験
3	2014	京菓子資料館 / 妙心寺 / 元京都市立植柳小学校	京菓子資料館、妙心寺　坐禅体験、京念珠づくり体験	4	2017	日吉ダム / 日吉町郷土資料館 / 農場	日吉ダム、日吉町郷土資料館、農場見学
3	2014	京丹波町 城崎さんビニルハウス / 京都府丹波自然運動公園 / 美山かやぶきの里 / 八幡神社 / ファーマーズマーケットたわわ朝霧	京野菜収穫体験、調理体験 美山かやぶきの里 ガイド付き散策 八幡神社 餅つき、ファーマーズマーケットたわわ朝霧				
3	2014	伏見稲荷大社	伏見稲荷大社				

* 1 行政政治、2 企業訪問、3 日本文化、4 環境
**2016 年度より一部合同にて開催

3.4.　成績評価

以上の活動については、担当教員が評価と修了書を出している。評価に関しては、出席や学習態度およびテストなどの成績に基づき評価している。プログラムで参加を求めている 36 時間の 80% 以上に出席した学生に対して成績書を発行してきた。評価項目は、日本語授業を除くプログラムの活動への参加（30%）、日本語授業（30%）、最終プレゼンテーション及び最終レポート（40%）である。北京大学や延世大学などの場合のように、本プログラムが発行している成績書と修了書をもって、各大学で単位に換算することもある。

4.　プログラムの効果

本章では、プログラムの効果について考察する。4.1. では個々の学生に対する教育効果、4.2. では海外学生の受け入れ数という量的な側面から当プログラムが組織に与える影響について考察していく。

4.1.　学生への教育効果

本プログラムの内容は、評価対象として学習時間に算入している正規活動と、評価対象外として学習時間に算入していない非正規活動に分かれる。本プログラムの正規活動である（1）学術講義、（2）日本語授業、（3）Fieldtrip や Cultural Experience などのその他の活動、及び学習時間は非正規活動に位置付けられる日々のディスカッションが、1. で述べた本プログラムの目的である 4 つの側面からの能力の育成―多文化への理解・関心（4.1.1.）、学際的アプローチの理解（4.1.2.）、言語運用能力（4.1.3.）、企画力・リーダーシップ・コミュニケーション能力（4.1.4.）―をどのように達成してきたかについて検討する。

本章の執筆に当たっては（a）毎年の最終報告書掲載の海外学生による Final report、（b）本学学生リーダーへのアンケート調査、（c）本学学生リーダーインタビュー 3 名（2021 年 9 月実施）、（d）2020 ／ 2021 年度オンラインプログラムに関するアンケート（各プログラム後に実施）を用いる [(5)]。

4.1.1.　多文化への理解・関心

当プログラムが目指してきたのは、本学学生を含む世界各国からの参加者に対して多文化共学の機会を提供することである。多文化共学とは、多様な文化的背景を持つ学生が共に学ぶことを意味し、それを通して、相手文化への理解を深めるとともに、自分自身が身につけてきた文化について捉えなおすことを目指すものである（韓・西島・家本・河合 2021、p. 1）。多文化の理解・関心への影響をどのように測るかについて、本稿では、直近 2019 年度～ 2021 年度の Final report の内容を根拠にし、日本文化や自身の文化、そして他の参加者の文化的背景についての理解・関心の深まりを考察する。本学学生については、リーダーインタビュー 3 名の結果と 2020 ／ 2021 年度オンラインプログラムに関するアンケートを用い、質的に考察していく。

まず、海外学生の報告書に見る多文化への理解・関心についてである。直近 3 年間の 2019 年度～ 2021 年度の報告書では、総参加者 181 名（ILAS114 名、KUASU67 名）のうち文化（Culture）への理解に関して述べていた者は 171 名、そのうち（i）日本文化（Japanese culture）170 名、（ii）クラスメート等の文化的背景に言及するものが 71 件、さらには（iii）自分自身の文化（Culture）への言及が 28 件あった。

（i）については例えば、以下のような記述がみられる。

The topics through ancient and modern, covered different aspects of Japanese culture, society and some environmental issues. While appreciating the aesthetics of classical Japanese literature, I was deeply impressed by the precise observation, vivid imagination and delicate expression of Japanese poets. The introduction of Japanese education helps us to get a better comprehension of the emphasis of communal living in Japanese society.（2019 年度 ILAS、北京大学）

I have learnt the spirit of concentration and perfection in business operation through the visit to the NABEL Co., Ltd, and the importance of environmental protection through lecture. These aspects of Japanese culture may not be easily experienced if I only visit to Japan as a tourist, and the Kyoto Summer Program 2019 provided me a chance to know different aspects of Japan, and to have a unique learning experience.（2019 年度 ILAS、香港中文大学）

日本語の授業だけではなく、ジェンダーや教育などのさまざまな講義や複数の校外学習を通じて、日本の文化も問題も包括的に見ることができました。（2020 年度 KUASU、ベトナム国家大学ハノイ校）

（ii）のクラスメート等の文化的背景に言及するものも多い。代表的なものとしては以下のようなものがある。

By interacting with other participants from different countries let us know more about the world deeply.（2020 年度 ILAS、香港中文大学）

The discussions were compelling, as everyone had a different background and therefore different views and solution ideas. Moreover, the topics were well chosen, and some even had a very personal importance to me and this encouraged me to engage actively in the conversations.（2020 年度 ILAS、ハイデルベルク大学）

The summer program provided a platform for students to openly discuss issues from Covid-19, Environmental issues and gender. I really enjoyed these interactions as they gave countries' perspective and the student thoughts on some of these issues affecting their communities and counties at large.（2021 年度 ILAS、ザンビア大学）

最終発表での、色々な国からの留学生の話は、それぞれの国の文化、観光スポット、学校、宗教、新型コロナの対策、住環境などについて知るきっかけとなりました。（2020 年度 KUASU、カリフォルニア大学サンディエゴ校）

（iii）に挙げた、自分自身の Culture ／文化についての言及には次のような記述がある。後者は、学術講義の一つで江戸時代の朝鮮外交に触れられ、それが幕末の欧米列強に対する外交政策の前例と扱われたとの講義内容に、触発された感想となっている。

From the academic lectures to the student activities to the discussions in both English and Japanese, I learned not just about Japan but about other countries and my own country as well.（2020 年度 ILAS、ジョージ・ワシントン大学）

(In) Professor Sano's lecture on Diplomatic Ceremonial of the Tokugawa Shogunate, she mentioned that Japanese-Joseon diplomatic practices were used as a precedent for the formation of Tokugawa-American ones. That made me interested in learning about Tokugawa-Joseon diplomacy beyond the extravagant welcoming ceremonies mentioned by Professor Sano.（2020 年度 ILAS、延世大学）

このように、影響の受け方、その表現は多様であるが、このプログラムの参加を通して確実に文化への関心が喚起されていることが見て取れる。

次に本学学生への影響を見ておこう。過去リーダーを務めた本学学生へのアンケート調査では、回答 16 名のうち 4 名が多文化への理解・関心の深まりについて次のように述べている。

このプログラムを通してアジア圏への関心が高まった。継続して東南アジアを中心として他の国の人と接する活動をしていきたいと思うようになった。（2019KUASU リーダー）

中国で働いてみたいという気持ちが一段と強くなった。また語学勉強へのモチベーションが高まった。（2018KUASU、2019ILAS リーダー）

常に国外のことを意識するようになった。語学もずっと学んでおり、いずれ在外研究等に行きたいという目標も持てるようになった。（2015KUASU リーダー）

4.2 で述べるが、本学からの 10 年間の参加者のうち、本プログラム参加の後、何らかの留学を決めた学生は、4 割～ 5 割となっている。参加者が次の留学に積極的になるということは、これらの学生における、留学先の国や文化への関心の高まりと無関係ではないだろう。以上は、オンライン以前と以後の報告書から分析したものであるが、内容に関して対面型とオンライン型では大きな差異は確認されなかった。また以下では、オンライン以降に実施した Google フォームを用いたオンラインアンケートをもとに、学術講義と日本語授業の満足度を分析する。アンケート結果についても、対面型とオンライン型では大きな差異はないと考えられる。

4.1.2.　学際的アプローチの理解

京都サマープログラムの特徴は、文理の垣根を超えた様々な分野の学術講義を提供してきたことである。現在まで京都サマープログラムで提供してきた講義は図 3 の通りである。当プログラムでは、2012 年度から 2021 年度までに延べ 65 コマの講義を提供してきた。学術講義をテーマ別に分類すると文化･歴史（17.7%）、文学･言語（17.7%）、政治（14.5%）、環境（12.9%）、農学（16.1%）、教育（11.3%）、霊長類（6.5%）、経済・経営（4.8%）、その他（1.6%）の割合となる。

これらの学術講義では、専門性に特化し過ぎることなく、各々の参加学生たちが関心の幅を広げることが出来る内容を提供するように工夫してきた。農学や霊長類学など理系科目と比較して、文化・歴史や文学・言語などの文系科目に若干の偏りがみられるが、日本語学科を始めとした文系分

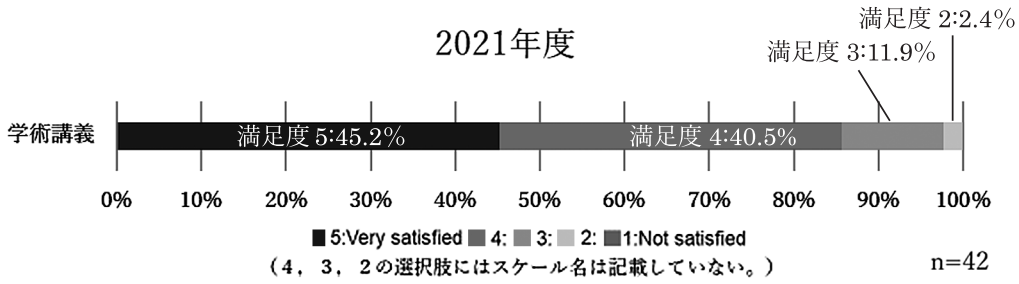

図３　学術講義の満足度

野を専攻している海外学生が当プログラムに数多く参加してきたことを反映している。学術講義は概ね肯定的な評価を受けている。2021 年度に実施したプログラムの事後アンケートでは、参加学生に任意で、5（Very Satisfied）から 1（Not Satisfied）までの 5 段階評価で評価してもらった。アンケート結果は図 3 の通りであり、参加学生 8 割以上が 4 以上の評価をしており、概ね肯定的な評価を得られていると言えるだろう（図 3 参照）。また、Fieldtrip などの活動でも学際性を重視してきた。例えば、2019 年度に実施した琵琶湖での実習では、琵琶湖博物館への見学だけでなく滋賀県立大学の教員による琵琶湖に関する講義、プランクトンの観察や琵琶湖での水質調査の実習をおこなった。

4.1.3.　言語運用能力

言語運用能力も、本プログラムの参加を通じて涵養される能力の一つである。日本語の授業は初級から上級までのレベル別のクラスを提供している。日本語授業は、当プログラムの中でも最も評価の高い活動の一つであり、海外学生と京都大学生リーダーとサポーターを含む参加学生全員を対象とした 2021 年度のプログラム後アンケートでは、参加者全員が日本語授業を肯定的に評価している（図 4 参照）。また、客観的評価としては、上述のように各クラスを担当する講師が海外学生の成績評価をおこなっており、日本語授業の成績はプログラム全体の成績評価に組み込まれている。授業では、基本的に日本語が教授言語として用いられる。各日本語授業には、日本人学生が言語補助のサポーターとして授業に参加し、双方向型の授業を提供するようにしてきた。海外学生の中には、各大学で日本語を勉強しているものの、本プログラムの参加を通じて初めて日本人と共に勉強する学生もいる。そのような学生にとって、プログラム参加前までに学んできた日本語を運用することで、日本語を実際に話すことに対する自信を得ることが出来る。プログラム後のアンケートの「良かった点」に関する質問では、日本語クラスの教授言語が日本語であるため、日本語を話す恐怖を克服するステップになったという意見もあった（2021 年度 ILAS、ハイデルベルグ大学）。他方、図 4 のアンケート結果には、留学生の学習補助として参加した京都大学生（38 名中 10 名）も含まれており、日本人学生にとっても、留学生の日本語学習のサポートが有意義な経験だったことが伺える。オンラインプログラムに関するアンケートではあるが、内容は同一であるため、対面時の評価を測る上でも参考になるだろう。

4.1.4.　企画力・リーダーシップ・コミュニケーション能力

国際交流を通じた本学学生の国際化は、本プログラムの重要な目的の一つである。海外学生にとっても、本学学生がプログラムに参加することの意義は大きい。正規活動においては、本学学生は、日本語授業における海外学生の学習補助、海外学生と京都大学生の合同プレゼンテーションの準備、

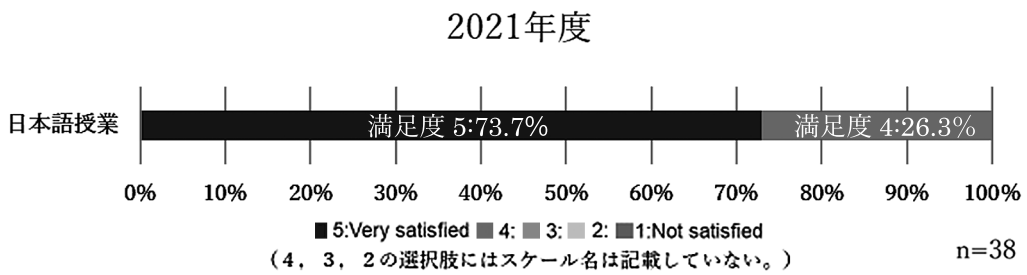

図４　日本語授業の満足度

表５　リーダー経験者への教育効果

	リーダーシップ	企画力（行動力・準備力）	コミュニケーション能力
リーダー A	―	・主体的に企画する能力 ・海外学生の関心に関する情報収集	・積極性
リーダー B	・相手と積極的に仲良くなる技術	・事前に**シミュレーション**する能力	・英語で会話する自信 ・分かりやすく伝えるスキル
リーダー C	**・全体を見渡せる視野**	―	・異文化に暮らす人との接し方 ・日本人学生との交流による視野

海外学生とのディスカッションなどに参加する。さらに、本学学生は、プログラム課外の活動においても海外学生と密接に交流する。プログラム外でも海外学生たちの生活の補助や相談など、全面的に海外学生の支援をおこなう。これらの海外学生と本学学生の交流においては、学生サポーターの中から選ばれる学生リーダーが主導的な役割を果たしてきた。さらに、本学学生の教育効果を高めるために、2020 年度からは学生リーダーが、プログラムの企画段階から主体的に関わることの出来る体制に変更した。学生リーダーはプログラム担当教員との連携の下、Cultural Experience や Fieldtrip などの活動の企画・運営に携わった。企業や訪問先との仲介や具体的な活動内容に関するミーティングなどを通じて、学生の主体的な企画力を涵養するように努めた。

対面型のプログラムの時に学生リーダーを務めた３名を対象としたインタビューでは、プログラムでの学生リーダーとしての経験を通じて、リーダーシップ、企画力そしてコミュニケーション能力が養われたという意見が聞かれた（表５参照）。リーダーシップに関しては、海外学生に対して積極的に声をかけ距離を縮めるための実践的な対人スキルや、分かりやすく伝える技術や、全体を見渡して他の学生をサポートする視野などが養われたことが指摘された。企画力に関しては、具体的な予定や動線を立て行動する計画性や前もって準備をする能力が培われたという意見があった。コミュニケーション能力に関しては、内向きだったものの、プログラムへの参加を通じて積極性が身に着いた、異文化の人と接する際に、具体的にどのように接すればいいのかという知識が身に着いたなどの意見があった。コミュニケーション能力や計画性・準備能力そしてコミュニケーション能力などは、国際社会で活躍するには必要な能力であり、国際的なエキスパートを養成するという、当プログラムの教育目的とも一致している。

4.2.　全学的な留学促進への影響

当プログラムが海外学生の本学へのより本格的な留学につながっているかと問われることがあ

る。現時点までで、当プログラムに参加した海外からの学生のうち、本学への大学院留学を実現した学生は１名、日本語・日本文化研修生として１年間本学に留学してきた者が１名となっている。日本の他大学への留学者を加えれば、数値は多少上がると思われるが、本プログラム参加学生の本格的留学への直接的なつながりは明らかとはいえない。しかし、直接参加学生本人が留学してこないとしても、その参加学生の在籍大学からの本学への留学希望者数にインパクトを与えていることは確認されている[(6)]。

より本格的な国際交流活動へのつながりという面から言えば、本学学生への影響の方が顕著である（表６[(7)]）。表６は、参加学生をプログラム参加前の留学経験の有無、プログラム参加後の留学の有無から、四つのタイプに分けたものである。プログラム参加後に留学した者については、短期か長期かについても記している。本学からの参加者延べ 353 名から、データのない 2012 年度と重複参加者を除いた 282 名を対象として検討を行った。その結果、プログラム参加の後、何らかの留学を決めた学生は、約４割～５割[(8)]に当たる 108 名（短期留学 67 名、長期留学 41 名）であった。特にタイプ③はプログラム参加前には留学経験がなく、プログラム参加後に留学に出かけた学生たちである。そういった学生は全体の２～３割[(8)]、留学経験のなかった者の３割～６割[(8)]を占めており、このプログラムが留学への積極性の喚起という効果をある程度、有することが見て取れる。

また、本プログラム参加の前にすでに留学経験のある学生も 104 名であり、留学未経験者と同等数存在する。このように、本プログラムが国際経験の蓄積の起点となるケースもあるし、すでに有している国際経験を生かして本プログラムに参加するというケースもある。このことから、各学

表６

	人数	割合（その１）*	割合（その２）**	内訳：参加後留学の種類	
				短期	長期
タイプ①（プログラム参加前留学経験○、参加後留学 ×）	54	19.1%	28.1%		
タイプ②（プログラム参加前留学経験○、参加後留学○）	50	17.7%	26.0%	27（9.6% ～ 14.1%）†	23（8.2% ～ 12.0%）†
タイプ③（プログラム参加前留学経験 ×、参加後留学○）	58	20.6%	30.2%	40（14.2% ～ 20.8%）†	18（6.4% ～ 9.4%）†
タイプ④（プログラム参加前留学経験 ×、参加後留学 ×）2018年度以前（コロナ感染拡大以前）	30	10.6%	15.6%		
タイプ④’（プログラム参加前留学経験 ×、参加後留学 ×）2019年度以降（コロナ感染拡大以降）	82	29.1%			
タイプ④”（プログラム参加前留学経験 ×、参加後留学 ×）プログラムリピーター	4	1.4%			
不明（前後関係が分からないもの等）	4	1.4%			
合計	282	100.0%（282）	100.0%（192）		

注：* サマープログラム参加者全体からみた各タイプの割合（その１）と、** コロナ禍以前の全体を 100 として傾向を測ったもの（その２）の二種類の割合を算出した。2019 年度後半よりコロナウィルス感染拡大のため、留学、海外渡航が非常に困難になったためである。
† プログラム参加後に留学した学生については、その留学が短期か長期かのデータも記載した。割合の幅は、上記その１とその２で算出した。

生の国際経験の蓄積における本プログラムの位置づけは多様であることが分かるが、いかなる場合も多文化の理解、関心を高める一連の国際経験の一端を担うプログラムになっていると言えるだろう。

また本プログラムは、客観的評価に基づいて内容の改善を繰り返してきた。参加学生へのアンケートの評価、最終レポートの内容、京都大学生のリーダーたちからのフィードバックに加え、ワイルド＆ワイズやウィーンの強化経費など競争的資金への応募あるいは KUASU の予算配分のさいに、プログラム全体の効果について、担当の委員会による審査を経てきた。改善意見が付された場合は、その都度改善してきた。

5. 今後の課題と展望

以上の通り、本プログラムは 10 年にわたって継続するだけでなく、着実に実績を積み上げ、本稿の 1. で最も重視する目標として挙げた海外学生と本学学生がともに学ぶことの出来る環境を実現し、一定の成果を上げてきた。対象大学も徐々に広がりを見せ、2018 年度以降ドイツを中心としたヨーロッパが加わり、2020 年度には米国、2021 年度には初めてアフリカの大学の学生を受入れて、より多様な文化的背景を持つ学生が集う環境を作り上げてきた。

今後の課題としては、（1）実施体制、（2）資金の獲得、（3）本学の全学教育における位置づけの検討があげられる。

まず、（1）実施体制についてであるが、教育面と運営面から述べたい。教育面では、京都大学が提供する講義を担当する講師の確保に関する問題がある。現在は、京都大学の教育及び研究特色を生かせるよう、学術講義は、一部の講義を除き京都大学の各研究科・研究所の教員にボランティアでの講義を依頼している。また日本語クラスは本学で日本語教育経験のある教員を雇用している。今後、プログラムの規模が拡大していくにつれて、講義数の拡大も視野に入れなければならなくなるだろう。講義数を拡大しない場合は 1 クラス当たりの人数が増え、講義を担当する講師の負担増が予想される。担当講師の確保の仕組み及び謝金の確保を含めた質の高い講義を続けていく体制の構築が急がれる。運営面では、国際高等教育院及び KUASU の教職員が連携してプログラムを遂行する体制が徐々に整備されてきていることはこの 10 年間の成果である。そして、2018 年度から派遣職員 1 名を雇用した。同職員は、先方大学・学外研修受け入れ先とのやり取り、ビザ等の学生の来日に関わる手続きの遂行を担当してきたが、毎年雇用が不確実な中で、ノウハウが蓄積されにくいのが現状である。また、すべての担当教職員は、他の業務を同時に抱える中で運営に携わっている。さらに、海外の大学からはプログラムの拡大を求める声があり、さらに本稿で述べた通り本学学生に対する教育効果も高く、より多くの参加が望まれる状況である。これを、実現するには講義担当教員の雇用、学生サポーターへの謝金、出勤管理などについて、膨大な時間と労力が必要となる。こうした業務をすべて大学の教職員が担当することは、ほぼ不可能に近い状況である。課題解決の提案は後述する。

次に（2）資金の獲得についてであるが、本プログラムは 2 つの学内資金、すなわち① 2021 年度からワイルド＆ワイズ共学教育受入れプログラム事業及び、②機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成―京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム―」の支援を受けて実施している。これらの資金により、現在は参加者全員に申請費用や学費の免除を行っているが、今後受講希望者が増加すれば、講師への謝金、プログラムの企画に関与す

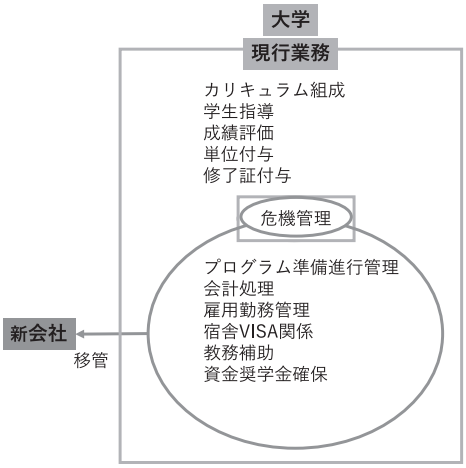

図５

る京都大学の学生への謝金も増加する。またワイルド＆ワイズは 2021 年度限りとなる。こうした状況下では、国立台湾大学や香港中文大学など世界の他大学で実施されているように、一定の学費免除枠以外の参加希望者には学費を支払う形での参加を受入れる必要があり、すでに検討に入っている（国立台湾大学、香港中文大学等）。学生交流の実態に基づき、参加大学毎に学費免除枠を計算したうえで、予算を超過する場合は学生に学費を要求する実施形態が現実的だろう。

（1）（2）の課題への対応を述べる。京都大学において短期留学の業務を専門に扱う会社を設立し、参加者より学費を徴収し、受入れ業務を一部会社に委託する形態の構築を提案したい。図５の通り、これが実現すれば、教職員はカリキュラム立案など、教育や本学学生と海外学生の指導に集中することができ、より質が高いプログラムを開発できる。多大な労力を有するサポーター学生の勤務管理・支払いも、効率的に対応できよう。各国大学、特に欧米の大学及び日本の私立大学等では、既にこのような会社を起こし、短期受入プログラムを実行しているが、国立大学法人で短期留学業務に特化した会社を立ち上げた例は管見の限りほぼ存在しない（森 2019、森 2020）。10 年にわたる実績を有する本プログラムをモデルとして、本学がパイオニアとして、この「会社化」を積極的に検討すべきであろう。企業化を実現するために課題となるのは、法制度と初期投資である。国立大学法人法の改正により、2017 年から導入された指定国立大学法人制度では研究成果を活用した収益事業に取り組む子会社を設立できるようになった（文部科学省 2019）。設立した子会社は企業向けのコンサルティング事業や研修・講習事業を行うことが可能である。東京大学では研修・講習事業中心の東京大エクステンション株式会社とコンサルティング事業中心の東京大学エコノミックコンサルティング株式会社を設立したが、京都大学では京大オリジナルが両方の業務を担当している。しかし、いずれも現在の研修・講習事業は主に日本国内向け、国際教育等高い専門能力が必要な海外学生向けの短期留学業務には関わっていない。現段階では資金面の問題に関しては、今後、国あるいは大学の初期投資を獲得することが課題である。

最後に、（3）本学の全学教育における位置づけも引き続き検討が必要である。すでに北京大学（2 単位）や延世大学校（3 単位）のように単位認定している大学があり、他大学においても検討が開始されている。派遣元大学での単位認定については今後も働きかけを行うが、本学での単位付与について早急に検討する必要がある。すでに、世界のトップ大学では、こうした短期プログラムを、

受入学生や在学生の別なく単位認定しているところが少なくない。本プログラムにおいても、受入学生はもとより、本学の参加学生の国際性が涵養され、企画能力が向上していることを実感するが、それをどのように評価し、本学の教育、特に全学教育に位置づけていくか。今後、本学においても単位化実現に向けて具体的な歩を進めたい。

注

(1) 海外から受入れる学生に対して、本稿では「海外学生」という用語を用いる。本来「留学生」と呼ばれる学生たちであるが、2020 年度 2021 年度はオンラインでの実施となり、受入学生たちはそれぞれの日本の外の居住地からの受講となった。そのため本稿では「海外学生」という語を一貫して使うこととした。

(2) 本学学生の学生リーダー、学生サポーター、受講生の区分は、以下の通りである。学生リーダーは、学生サポーターや受講生の代表として、教職員とプログラム参加学生の橋渡しの役割を担う。また学生リーダーは、プログラム開始前から参加し、プログラムの企画・運営などの補助をおこなう。2012 年度から 2019 年度までのプログラムでは、学生サポーターの中から学生リーダーを選出していた。2020 年度以降は、学生リーダーを独立した枠として設けた。学生サポーターは日本語授業の補助や通訳そして生活補助などプログラム期間中の海外学生への学習補助を担当する。学生リーダーと学生サポーターに関しては本学で雇用する。受講生は、海外学生と同じようにプログラムに参加する本学学生である。学生サポーターは、受講生の中から書類審査と面接を通じて選出される。規定の参加時間数を満たした学生サポーターと受講生には修了書を発行する。

(3)「北京大学生のためのサマープログラム」の参加者に対して 2012 年度～ 2014 年度のプログラム後に実施したアンケートに詳しい。当アンケート調査は以下の条件で行われた。
2012 年度 15 名配布／ 15 名回答
2013 年度 14 名配布／ 14 名回答
2014 年度 14 名配布／ 14 名回答
合計 43 名配布／ 43 名回答　回収率 100%

(4) 京都アメリカ大学コンソーシアムとは、1989 年に京都市内に設立された。日本研究を志す米国の大学生が毎年約 40 ～ 50 名来日して、日本に関する講義を受けている。参加大学は、ボストン大学、ブラウン大学、コロンビア大学、コーネル大学、シカゴ大学、エモリー大学、ハーバード大学、ペンシルベニア大学、プリンストン大学、スタンフォード大学、ワシントン大学（セントルイス校）、イェール大学、バージニア大学である。

(5)（a）～（d）の各調査の実施状況は以下のとおりである。
（a）毎年の最終報告書掲載の海外学生による Final report を分析に用いた（アジア研究教育ユニット・国際高等教育院（2020、2021、2022））。
（b）本学学生リーダーへのアンケート調査
2021 年 8 月 30 日と 9 月 2 日に配布　KUASU13 名配布／ 9 名回答
2021 年 8 月 28 日配布　ILAS　6 名配布／ 5 名回答
合計　19 名配布／ 14 名回答（回収率 73.7%）
（c）本学学生リーダーインタビュー 3 名
上記 (3) の回答者のうち、インタビューへの参加を承諾した者
2021 年 9 月実施。一人 1 時間程度の聞取り
（d）2020 ／ 2021 年度オンラインプログラムに関するアンケート（非公開内部資料）
2020 年度プログラム後（2021 年 3 月 1 日配布）
海外学生、リーダー、サポーター、受講生の全 107 名中 54 名（回収率 50.5%）
2021 年度プログラム後（2021 年 8 月 24 日配布）
海外学生、リーダー、サポーター、受講生の全 157 名中 44 名（回収率 28.0%）

(6) これまで留学によって個人の文化理解がどのように変化するかについてはすでにいくつかの研究がなされている。例えば、横田（2016）では、留学経験者と非経験者を比較する大規模調査を行い、長期的影響を考察している。その中で、多様な価値観・文化的背景を持つ人々の交流への積極性に関する観点があり、留学経験者がより積極的になることが示されている。各大学においても多数の事例研究が行なわれており、いずれも留学が文化への理解、関心を高める点について、参加学生への一定の効果を確認している（木村 2011、大津・佐竹 2016、佐々木 2017、徳井 2002 等）。

(7) 国際教育交流課提供のデータをもとに筆者作成。また、参照したデータは本学が把握している学生の留学状況に基づいている。

(8) 割合に幅があるのは、コロナウィルス感染症拡大により留学が全般的に難しくなったことの影響を考慮したためである。数値は、当該要因を考慮せずに算出した前者と、考慮して試算した後者となっている。

参考文献

(1) アジア研究教育ユニット・国際高等教育院（2020）『多文化共学短期［受入］留学プログラム 2019 年度受入実施報告書』

(2) アジア研究教育ユニット・国際高等教育院（2021）『多文化共学短期［受入］留学プログラム　通称　京都サマー／スプリングプログラム　2020 年度受入実施報告書』

(3) アジア研究教育ユニット・国際高等教育院（2022）『多文化共学短期［受入］留学プログラム　通称　京都サマー／スプリングプログラム　2021 年度受入実施報告書』（2022 年 3 月刊行予定）

(4) 大津理香, 佐竹正夫（2016）「短期海外語学研修にはどれほどの効果があるのか―常盤大学の場合―」『留学交流』独立行政法人日本学生支援機構，2016 年 8 月号 Vol. 65 p. 16–24 https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/__icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201608otsusatake.pdf（最終閲覧 2022 年 2 月 18 日）

(5) 韓立友・西島薫・家本太郎・河合淳子（2021）「協定等に基づく多文化共学短期派遣留学プログラム―10 年間の実践記録と今後の展開への視点―」『京都大学国際高等教育院紀要　第 4 号』pp. 1–18.

(6) 木村啓子（2011）「短期海外研修プログラムの効果と役割」『留学交流』2011 年 12 月号 Vol. 9、p. 1–7 https://www.jasso.go.jp/sp/ryugaku/related/kouryu/2011/__icsFiles/afieldfile/2021/02/18/keikokimura.pdf（最終閲覧 2022 年 2 月 18 日）

(7) 佐々木直子（2017）「短期語学留学プログラムによる効果の検証」『電気通信大学紀要』29 巻、第 1 号、pp. 1–9

(8) 徳井厚子（2002）「短期語学研修におけるコミュニケーション意識とイメージの変化―ユタ大学夏期英語研修プログラムの事例―」『信州大学教育学部紀要 107』p. 25–33

(9) 森卓也（2019）「大学経営における出資会社の役割に関する研究」『大学経営政策研究』第 9 号、pp. 87–103, http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/pdf/2018/06-%E8%AB%96%E6%96%87_%E6%A3%AE.pdf（最終閲覧 2021 年 9 月 26 日）

(10) 森卓也（2020）「国立大学法人の出資会社に関する研究―その制度変遷と私立大学との比較―」『大学経営政策研究』第 10 号（2020 年 3 月発行）：pp. 71–87, http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/pdf/2019/05-paper_2019.pdf（最終閲覧 2021 年 9 月 26 日）

(11) 森真理子，佐々木幸喜（2015）『SEND プログラム（チュラーロンコーン大大学サマープログラム／ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール／「京都で学ぶアジアと日本」研修／インドネシア大学スプリングスクール／シドニー大学スプリングスクール）2014 年度実施報告書』

(12) 横田雅弘（2016）『グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査報告書』2013 ～ 2015 年度 科学研究費 補助金（基盤研究（A）課題番号 25245078 グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較）

(13) 文部科学省（2019）「参考資料（20 ／ 20）指定国立大学法人制度について」2019-03-26. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1414767_22.pdf（最終閲覧 2022 年 1 月 9 日）

Hosting Multicultural Educational Short-term Study Abroad Programs Based on Inter-University Agreements

—10 years of Practice and Perspectives on Future Development—

Liyou Han*, Kaoru Nishijima**, Junko Kawai***

Abstract

This paper assesses the curriculum, educational effects, challenges, and prospects of a two-week study program that has been hosted by Kyoto University in Japan, the Short-term Multicultural Study Program (known as the Kyoto Summer Program), for the past ten years (2012–2021). Beginning as a program exclusive to Peking University in 2012, today students from more than 20 top universities in East Asia, Southeast Asia, Europe, North America, and Africa participate together with local Kyoto University students. The program provides a mixture of (1) academic lectures, (2) Japanese language classes, (3) field trips, and cultural experiences to develop multicultural understanding, interdisciplinary perspectives, language competencies and student leadership. During a decade of operation, both domestic and international students report educational, social, and personal growth benefits. These benefits have been sustained even during the recent COVID-19 pandemic with the help of online and other tools. Despite this, challenges persist and thus, to enhance the efficiency and quality of the program, the authors examine the potential for outsourcing administrative work to a new company and establishing a system to formally grant educational credits.

Keywords: Short-term Study Program, Collaborative Learning, Interdisciplinarity, Language Learning, Student Exchange

* Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

** Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research, Kyoto University

*** Education Center for Japanese Language and Culture, Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University